

（現状の説明）

授業形態は主として講義・演習・講読・実習によって行われ、授業方法は講義科目では主として講義形式によるが、演習科目では講義に加えて履修者による発表や討論による対話形式がとられている。さらに講読科目ではテキストや資料・史料の講読と解説、実習科目では、実験・調査やフィールドワークによる実習など、その科目の目的に適合した様々な方法が導入され、全体として教員から学生への一方通行的な知識の授与に留まらず、学生の理解と達成度が適宜確認できるような方法が工夫されている。

マルチメディアの活用やパワーポイントのような教材提示方法の利用は近年活発になってきており、特に2003年度には学部の専任教員全員に1台ずつのノートパソコンの配備を行って、このような取り組みの促進を図ろうとしている。しかしながら、授業形態は担当者個人の裁量に任されていること、教室設備などのインフラ整備が不十分であるという全学的問題などから、現状ではそれらは十分活用されているとは言えない。

なお、「遠隔授業」については、文学部で開講しているものはないが、文学部教員が中心になって運営・担当している全学開講科目である総合コース科目（総合コース464）が神戸三田キャンパスとの遠隔授業として提供されている。

（点検・評価の結果）

授業形態については、それぞれの授業の目的に即して適切な方法が選択されている。マルチメディアの活用については、現状の説明でも述べた如く、不十分な状況である。

教員相互の情報交換については、「人文演習担当者会議」において一部実現され、また一部の専修や科目においては、自主的な取り組みとして活発に行なわれているところもあるが、多くは教員個別の努力に委ねられている。

（改善の具体的方策）

学生による授業評価の結果を活用し、より良い教育方法について教員側の意識をさらに高めるための方策を検討する。また、授業へのマルチメディアの活用状況などについては、各教員を対象とした調査を行い、その現状と問題点を把握して適宜に対処していく必要がある。今後とも、カリキュラム委員会やFD委員会を中心に、またマルチメディア等に関しては情報環境委員会も交えて、文学部としてさらに教育効果を高めるような教育方法のあり方について、継続して検討していく。さらに、教室などのインフラ整備については、学部として必要な要求内容をまとめ、その実施を求めていく。

2.1.4.4 教育成果のあり方

【評価項目 6-4-1】 教育効果の測定

- （必須要素）教育上の効果を測定するための方法の適切性
- （必須要素）教育効果や目標達成度及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況
- （必須要素）教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況
- （必須要素）卒業生の進路状況
- （選択要素）教育効果の測定方法を開発する仕組みの導入状況

- (選択要素) 教育効果の測定方法の有効性を検証する仕組みの導入状況
- (選択要素) 教育効果の測定結果を基礎に、教育改善を行う仕組みの導入状況
- (選択要素) 国際的、国内的に注目されるような人材の輩出状況

【評価項目 6-4-2】 厳格な成績評価の仕組み（成績評価法）

- (必須要素) 履修科目登録の上限設定とその運用の適切性
- (必須要素) 成績評価法、成績評価基準の適切性
- (必須要素) 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況
- (必須要素) 各年次及び卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性
- (選択要素) 学生の学習意欲を刺激する仕組みの導入状況

<2003年度に設定した目標>

以下の全学的な目標を、学部においてもそのまま目標とする。

1. 授業時間外の学習を促進し、理解を深めるためのレポート提出の推進。
2. 授業時間内における平常試験の実施による学生の理解度・到達度の確認。
3. 卒業判定を含めた教育結果の判定のための客観的基準の設定。
4. 2005年度よりのGPA制度の導入。
5. 授業開始2ヶ月後の時点での履修中止制度の採用。
6. 成績評価（講義科目）の平均点の基準（70-75点）の設定。
7. 学習意欲を喚起することも含めての、学部における成績上位者の公表。

（現状の説明）

文学部における学生の成績評価は、『授業科目の評価について』と題する冊子を毎年作成し、専任教員および非常勤教員の全員に配布している。この冊子では「授業科目の開講形態と評価」「評価方法の種類」「評価方法の主なポイント」「成績発表と最終評価」「成績報告書の記入」「試験問題および成績統計の開示」に関して、詳細な説明が行われており、「成績評価・試験内規」などの参考資料が添付されている。教員はこの冊子にしたがって、厳格な成績評価を行うことになっている。

文学部における成績評価方法は「平常評価（授業での発表、平常レポート、小テストおよび課題、授業中の平常試験、これらの組み合わせ）」と「定期試験」に大別され、「定期試験」はさらに「筆記試験」と「定期試験にかわるレポート」に分けられる。これらの組み合わせも可能であり、結果的に、(1)平常評価の成績のみによって評価する、(2)定期試験にかわるレポートの成績と平常評価の成績をあわせて評価する、(3)定期試験にかわるレポートの成績のみによって評価する、(4)定期試験の成績と平常評価の成績をあわせて評価する、(5)定期試験の成績のみによって評価する、の5つのパターンから授業担当教員が選択する。近年の傾向として平常評価やレポートによる成績評価が増加の傾向にあるが、ただこれのみによる成績評価は授業時数の確保という側面を含めて是正すべきだとの意見もある。

各授業の評価方法は、『ネットシラバス』および『授業実施要項』にて、各学期の初めに学生に示されるが、履修した学生の状況により、各学期の授業が始まって約1カ月の時点で変更することが認められており、当該科目の授業中に担当教員が学生に伝達するとともに、変更のない科目を含めすべての科目について『成績評価方法一覧表』を冊子として、学生に配布している。

文学部ではその学問分野の多様さや、授業形態の多様さ（講義、語学、講読、実習、演習など）、また少人数クラスから多人数クラスまで、授業科目によって運営方法にも大きな違いがあり、上記のような多様な成績評価方法がとられている。またここに挙げた文学部の多様性からして、成績評価における平均点の基準設定の必要性は認めつつも、幅の狭い画一的な基準設定にならないよう配慮しながら検討していかなければならないと考えている。

一方で、言語教育科目、情報処理科目、人文演習など、同一目的の授業を複数の教員が担当する科目については、クラス間で授業内容はもちろんのこと、成績評価方法についてもできるだけ統一するよう、学部単位、学科単位、専修単位などで担当者会議を随時開催している。なお、言語教育科目では、中国語および朝鮮語において、それぞれクラス間では試験問題を統一しており、学科科目においても、行動学統計や心理科学研究法などで、それぞれクラス間で試験問題を統一している。

また、教育効果向上のために全学的に実施している履修登録単位数制限について、文学部では上限数を以下のようにしている。

| | 第1学年度 | 第2学年度 | 第3学年度 | 第4学年度 |
|----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 2003/2004年度入学生 | 各学期 20 単位 | 各学期 24 単位 | 各学期 24 単位 | 各学期 36 単位 |
| 2005年度以降入学生 | 各学期 20 単位 | 各学期 24 単位 | 各学期 24 単位 | 各学期 30 単位 |

卒業生の進路状況については、「2.1.1 理念・目的・教育目標」のグラフを参照。

（点検・評価の結果）

文学部の特性である、多様な学問領域・授業形態のため、一律に教育効果を検討し、数量的な比較検討を行うことは困難であり、専修ごとあるいは科目ごとに教育効果を個別検討することが必要であるが、そのためのシステムはまだ構築されていない。また、量的分析だけでなく質的分析が必要であるが、この点でも適切なツールを求めることは難しい。このことは成績評価の方法とともに平均点の基準設定にも通じるところである。

しかしながら、上記の成績評価方法に見られるように、多様性を尊重した教育の実践ができるだけ可能になるような制度は整えられている。ただし、多様性の反面として、煩雑な事務作業が発生したり、学生側の制度への理解度の不十分さから、履修登録ミスや成績評価方法に対する誤解を生んだりすることも少なくない。

大学院の進学に関しては近年、他大学院進学者が増えている理由は、他大学院が定員を増やしていること、新設大学院が増えていることなどが原因であろう。

（改善の具体的方策）

多様な学問領域・授業形態を考えると、統一的な改善策を実施することは困難である。教育効果に関しても、文学部専任教員の間では「多様性の尊重」という点についての合意はあるが、それ以外の点では共通理解を得ることが難しい。

ただ成績評価の方法や平均点の基準設定においては、多様性を阻害しない範囲での実施についてカリキュラム委員会で検討していくことになる。

専修単位、教員個人レベルでの改善努力が必要であるが、FD委員会が中心となって、授業方法の工夫に関する談話会などを学部としても企画する必要があるだろう。現在、人文演習科目については学期ごとに開催される担当者会議で、そうした試みが行われている。また、文学部は学問の性格上、多くの非常勤講師を抱えているが、専任教員と非常勤講師との情報交換会を専修単位で行っているところもあり、文学部全体としてもこのような専修単位の試みを今後さらに推奨する方向である。

登録単位数制限の教育的効果については、今後さらに検討すべきである。

「卒業生の進路状況」については、確かに教育効果の測定指標の一つではあるものの、就職率や大学院進学率の側面からのみ教育効果を語ることは適切ではない。社会的妥当性を持った測定指標について、さらに検討する必要がある。

2.1.4.5 教育の質の向上

【評価項目 6-5-1】 教育改善への組織的な取り組み

- (必須要素) 学生の学修の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置とその有効性
- (必須要素) シラバスの作成と活用状況
- (必須要素) 学生による授業評価の活用状況
- (必須要素) FD活動に対する組織的取り組み状況の適切性
- (選択要素) FDの継続的实施を図る方途の適切性
- (選択要素) 学生満足度調査の導入状況
- (選択要素) 卒業生に対し、在学時の教育内容・方法を評価させる仕組みの導入状況
- (選択要素) 高等教育機関、研究所、企業等の雇用主による卒業生評価の導入状況
- (選択要素) 教育評価の成果を教育改善に直結させるシステムの確立状況とその運用の適切性

<2003年度に設定した目標>

1. シラバスの充実
2. 学生による授業評価の有効利用
3. GPA制度による学業奨励
4. FD活動の整備
5. カリキュラムの多様化・重層化による有機的教育の促進

(現状の説明)

とりわけ文学部は授業科目が多岐にわたるが、シラバスに関して、講義目的、各回の授業内容、授業方法、成績評価方法、教科書、参考文献、学生による授業評価の方法などを記す形式で、2001年からすべての科目において作成し、ホームページで学内に公開している。文学部では、履修者に対してウェブシラバスのコピーを閲覧に供している。これはウェブシラバス利用の促進を図るためである。

また文学部では、他学部と同様2005年度にすべての授業科目を対象として「学生による授業評価」を実施する。そこでは自由記述とマークシートによるアンケート結果を受け、現在の授業実態を認識し、各教員がこれに回答を行うことを通じて学生にフィードバックする。これが今後の授業改善に役立つであろうことは十分に期待できる。すでに2005年